さんにち NIE ワークシート

山梨日日新聞

年　　組　名前：

問1
難民キャンプ内にある小学校の児童たちは、どのような厳しい教育環境の中で、勉強していますか。

問2
清水先生は、ヨルダンでの経験を踏まえ、穂坂小の児童たちに何を伝えたいと思っていますか。

問3
学校に移民の子どもが転校して来たら、あなたは、仲良くなるためにどう接したいですか。

山梨プラスワン 2021 〈下〉

ヨルダンから帰国 教壇に

広げた視野 伝える時

韮崎・穂坂小教諭の清水貴央さん(24)＝北杜市高根町五町田＝は3年生の道徳の授業で、黒板に「小学校」を意味するアラビア語を書き込んだ。中東・ヨルダンの難民キャンプで暮らす児童の写真とともに、現地の小学校の様子を紹介。「もし、学校に移民の子どもが来たらどう接する？　一緒に考えてみよう」と児童に呼び掛けた。

「今、自分ができることを一歩ずつ進めよう。短い期間でも自分がヨルダンで学んだことを伝えたい」という思いで教壇に立っている。

2019年3月に大学卒業後、約半年間、韮崎市内の小学校で勤務。19年12月に国際協力機構（JICA）の青年海外協力隊員としてヨルダンに派遣され、パレスチナなど近隣諸国の難民が集まるキャンプ内で、小学校の体育教師を勤めた。

しかし、新型コロナウイルスの世界的な感染拡大で、JICAは全隊員の緊急帰国を決定。「まだ4カ月。何もできていない」と失意を抱きながら、昨年3月17日に日本に戻った。

「まずは今を全力で生き、コロナが収束した後はヨルダンに戻りたい」。落ち込んだ気持ちを奮い立たせ、日本の教育現場に戻る決意をした。学力向上支援スタッフとして穂坂小に赴任し、再び地元・峡北地域の教壇に立った。

体育以外にも、国語の授業でヨルダンの母国語・アラビア語を教えたり、道徳で難民について考えてもらったりと、自身の経験を生かした授業を展開している。

わずか4カ月弱のヨルダンでの教員生活だったが、日本との教育環境の歴然とした違いに衝撃を受けた。家は石造りで便所もくみ取り式など衛生環境は悪い。学校では約40人の児童が壊れかけた机を共有で使い、すし詰めの状態。それでも子どもたちは真剣な表情で授業を聞いてくれた。

日本の学校生活は世界で当たり前のものではなく、厳しい環境でも子どもたちは懸命に学んでいる―。穂坂小で勉強を教えるだけでなく、ヨルダンの経験を踏まえ、「世界に視野を広げ、多様性を認め合う姿勢」を伝えようと試行錯誤する。

「その子の国の言葉を勉強して話し掛けてあげたい」「日本の文化を教えながら仲良くなりたい」。グループ討議を終えた3年生は自分たちで考えた接し方を答えていた。「子どもたちは想像力を働かせて意見を持ち、自分が伝えたいことをくみ取ってくれた」と手応えを感じている。〈内藤洸志〉

▲ヨルダンの民族衣装をまとい、現地の様子を説明する清水貴央さん＝韮崎・穂坂小

スマホで動画 MOVIE

（2021 年 1 月 5 日付 山梨日日新聞 20 面）

教育目的以外の無断転載 複製および頒布は禁止します
Copyright © 2021 山梨日日新聞社 THE YAMANASHI NICHINICHI SHIMBUN.